

巻頭言

十勝教育研究所
所長

山田 洋



「省察的実践検証」と「往還」

一昨年度、教育審議会の資料に目を通していたとき「省察的実践検証」という言葉が目につきました。私にとつては、聞き慣れない言葉でもとも気になりました。

十勝教育研究所は、業務の中核となる2つの調査研究を行っています。1つは、全ての市町村教育研究所から共同研究員を出して進める共同研究です。研究主題「自分の考えを表現し合い、学びを深める子どもを育む研究」がそれです。教科指導を切り口に進める研究です。もう1つは、管内の小・中学校2校に協力して進める協力員研究です。「他者を尊重し、責任をもつ

て行動する子どもを育む研究」です。避けては通れない情報モラルを含む情報活用能力の育成について、特別活動を切り口に進める研究です。

そして研究の検証は、2つとも必ず授業を通した「実践検証」とし、これまでも子どもの声や指導者の声、授業を参観していた先生方の声を重視して行ってきました。

このような中「省察的実践検証」という言葉を目にしたのです。もしかすると、今頃気が付いたのかと言われることかもしれませんが、簡単にいうと「自分事として考える」という意味でした。実践に照らし合わせて検証していくのは当たり前のことですが、「も

う一歩前に進んで、自分事として研究の中身を捉えて、皆で検証して（教室で活用して）いきましよう」という意味が込められています。

昨年度は、国立教育政策研究所の先生方も随分と「省察的」という言葉を強調して使っていました。

これと同じく、今教育研究で重要視されているのが「往還」です。

今まで十勝教育研究所では調査研究成果の「還流」を目指して、毎年2月に発表大会を開催してきました。かつては集合型の発表大会を開催してきましたが、3年前より感染症対策と年度末の忙しい時期でもあることを考慮し、完全オンラインでの開催としています。移動の時間もなく、子どもが帰った後の時間を利用した参加が可能となりました。

うれしいことに、皆さんのご理解により年々参加者が増えています。

さらに、これからは先の「往還」も意識したいと考えています。

現在、発表大会のブレイクアウトルームでは、研究内容に対してどう思

うかよりも、自分はどうしているかの交流に重きを置いています。これにより研究成果と、自分の実践、ほかの参加者の実践を比較交流することができず。個人レベルで参加できることとなり、とても好評です。

このように個々が参加できる機会を充実させるため、今年度はZoom契約を見直し、希望者はそれぞれ個別にオンラインで接続することを可能とします。また、直接授業を行わない教育関係者の皆様にも理解していただくために視聴だけの参加も受け付けるようにします。更なる広がりにも期待がもてます。

また研究所では、ホームページのリニューアル作業も進めています。今までは、学校に冊子を届けていましたが、これからは、先生一人一人に資料が届き授業づくり役に役立ててもらえるようにデジタル化を加速させます。

調査研究成果の「往還」は、「省察的実践検証」とセットになり、学校現場との活発な往来で成立すると考えています。よろしくお願ひします。